

「羅生門」における「作者」概念の考察

1 はじめに

本論の執筆にあたって、CiNiiにて「羅生門 語り」と検索し、該当した46件の文献うち、無縁な分野のものを除き、入手可能な16本の文献と、本学附属図書館にある資料のうち7件の文献、計23件の先行研究をふまえて論究する。

2 先行研究の整理

「羅生門」における「作者」の捉え方を整理する。

23件の先行研究のうち、「作者」と語り手の関係が記述されていた文献は15本であった。これらの15本の文献における「作者」と語り手の関係性を表に整理すると次のようになる。

「作者」と語り手の関係	文献数
「作者」 = 語り手	12
「作者」 \simeq 語り手	1
「作者」 \subseteq 語り手	1
「作者」 \neq 語り手	1

この内訳は別表にて示すが、おおよそ上記の表のとおりに整理できる。なお、「作者」と語り手の関係の捉えられ方で圧倒的に数を占める「作者」=語り手の捉えられ方は、一部理由が述べられているものがあった（例：相沢毅彦(2016)）が、全く論証されずに「作者」=語り手だと捉えられている文献が大半を占めている。

次の章で、上記の表に整理した「作者」と語り手の関係の捉えられ方の4種類を順に検討する。

3 「作者」と語り手の関係の捉えられ方の検討

3.1 「作者」=語り手 論の検討

「作者」=語り手だとする相沢（2016）は、次のように述べる。

また、その〈語り手〉は「作者はさつき」とあるため、「作者」を自称する〈語り手〉であるということである。(p.28)

しかし、ことはそう単純ではない。江藤茂博(1994)が指摘するように、語り手の語りと、「作者」が「書いた」とする文は異なっている。このことを論じるために、まずは本

文を引用する。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云ふ當てはない。

そして、「作者」が「さつき」「書いた」という文に該当するのは「羅生門」第2文だと考えるのが妥当であろう。（これには異論があるが、それについては3. 4「作者」≠語り手で述べるため、今は触れない。）第2文は次のとおりである。

一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

第22文で「作者」が引用した文は{下人, が, 雨やみ, を, 待つ, て, ゐ, た}という語の集合である。一方で、第2文は{一人, の, 下人, が, ,, 羅生門, の, 下, で, 雨やみ, を, 待つ, て, ゐ, た, 。}という語（と記号）の集合である。そのため、第2文と第22文は同じではない。「作者」が「書いた」とされる文は、「羅生門」には存在しない。

引用元が文章中になく、語り手の語りに存在しない以上、「作者」を語り手だと解釈するのは不適當である。

3. 2 「作者」≡語り手 論の検討

「作者」≡語り手という捉え方をしているのは渡邊拓(1992)である。具体的には次のように述べている。

あくまでこの「作者」は語り手の変異体としての「作者」なのである。(p.20)

この文は、「作者」は作者でないという文脈で述べられている。「作者」=語り手という捉え方に限りなく近いものの、「語り手の変異体」というからには、語り手そのものではないと捉えていると考えるのが妥当である。とはいえ、先に述べた通り、そもそも、「作者」が「書いた」とされる文が本文中に存在していない。そのため、そもそも「作者」が作中に顕在している」(高野敦志; 2006; 26)や「<作者>が作中に登場しつつ」(天満尚仁; 2013; 90)などと考える事自体が誤りなのである。

3. 3 「作者」∈語り手 論の検討

まずは、「作者」∈語り手だと捉えている高野敦志(2006)の文を引用する。

「羅生門」においては、「作者」が作中に顕在しているので、「作者の顔出し」に含めて考えるべきである。

<略>「羅生門」の冒頭部分だが、ここではまだ「見ているほう」の存在は不明である。しかし、その実態は<略>「作者」と同一と考えて差し支えない。(p.26-27)

今回の論文の眼目は、「視点」を保持する存在が必ずしも単一に確定できないという点にある。「作者」が作品の中に存在していても、「視点人物」の特徴を示す人物（「羅生門」の下人）が存在したり＜略＞するのである。(p.31)

ここでは、語り手ではなく、「視点」の語を用いているため、上記の文を「作者」∈語り手と解釈するのは本来不適當である。しかし、松本修(2015)が述べるように、「視点」とは、「作中人物（登場人物）や語り手の見えの立脚点・知覚の起点を指すことがあり、(p.143) 今回はまさに「語り手の見えの立脚点」という意味合いで「視点」の語を用いているため、語り手に「作者」が内包されると捉えられるのである。

とはいえ、引用箇所冒頭の「「作者」が作中に顕在している」は先に述べた通り、誤りであるため、高野(2006)のこの箇所は誤りである。

しかし、語り手の視点が「作者」を内包するという捉え方に賛成はしないものの、語り手の視点が複数あると捉えることには賛成である。詳しくは4章で述べる。

3. 4 「作者」≠語り手 論の検討

本論が先行研究を読み進める中で最も興味深く感じられた。しかし、不満もある。少し長いが、まずは本論の論者である江藤茂博(1994)の文を引用する。

しかし、テキストの表現を厳密に辿ると、登場人物「語り手」が語る内容は、その「語り手」でもあるはずの「作者」が「書いた」「羅生門」と同じではない。それには、次のようなことが考えられる。この語りは登場人物「語り手」が語りの現在に生成するテキストなので、「作者」の「書いた」（「語り手」が自ら語ったことを遡った）「羅生門」と同じでなくても当然であるということだ。これは、「語り手」が語ったことはそのまま「書いた」ことになるというコードを壊すことになる。「語り手」が語るときにはじめて語られる世界は姿をあらわし、「語り手」はそのまま「作者」そのものではなくて、すでにどこかに書かれてある先行する「羅生門」をこの「語り手」は手にして語っているということと同じなのだ。当然ながらその先行する「羅生門」は「語り手」の内に存在するものでしかない。そして、「語り手」が自由に読み、そこにテキストが成立するという、この「語り手」の語りによるテキスト生成のありようがここに示されるのである。そして、このテキストに読み手が向かうとき、読み手は「語り手」の語る世界に先行する「羅生門」の世界をもうひとつの世界としてうかがい知ることができるのだ。

具体的にそのような読解をもたらすのは、この登場人物「語り手」が最初に語り出していた「或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。」という表現によってであって、それが登場人物「語り手」が引用している言葉「下人が雨止みを待つてゐた」とはずれがあったからだ。(p.14)

江藤（1994）は、語り構造を次の図に表している。次の図である。

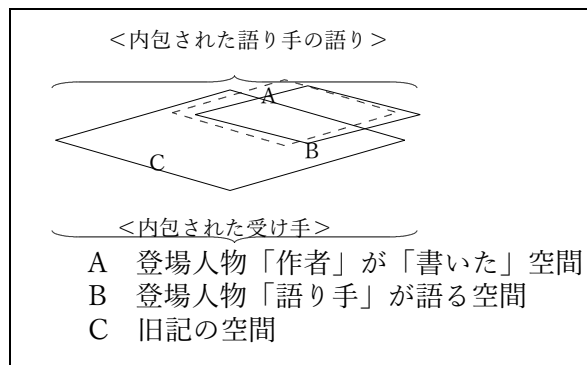


図1：語りの重層性

つまり、「作者」が「さつき」「書いた」文というのは、「羅生門」内にあるのではなく、語り手が読んでいる「作者」が「書いた」文章にあり、語り手は「作者」が書いた文章を読みながら、適宜フランス語を用いたり、旧記（舊記）を参照したりして「羅生門」を語っているというのである。

大変面白い読みであるものの、賛成はしかねる。なぜならば江藤（1994）は「さつき」を見落としている。

「作者」が「下人は雨やみを待つてゐた」と「書いた」のは「さつき」なのである。また、図1にある「A 登場人物「作者」が「書いた」空間」というものは、江藤（1994）が生み出したに過ぎず、「羅生門」中にその存在をほのめかす文はない。「羅生門」第2文と第22文が一致していないことを根拠に江藤（1994）は「登場人物「作者」が「書いた」空間」を創造したわけであるが、これは、宇佐美寛（2001）がいう「なれあい」「甘えあい」（p.38）に反する。

また、「さつき」という時間の幅を、「作者」が何かしらの文章に「下人が雨やみを待つてゐた」と記述してから、その文章を完成させ、「羅生門」の語り手がなんらかの形で手に取り、読み、舊記を参照しながら「羅生門」を語り、第22文に到達するまでの時間と解釈するわけにはいかない。不自然である。

だから、江藤（1994）の読みは面白くはあるものの、賛成はできない。

4 「作者」の捉え方と「作者」が文中に記される意義

3. 1で述べたように、「作者」が「書いた」と語り手が語る文は「羅生門」中に存在しない。だから、「作者」を語り手だととらえることは適切でない。また、「作者」が文章の登場人物だと捉えるのも適切ではない。

そこで、「作者」の正体ではなく、読書行為論の立場から、「作者」をどう捉えるか、また、「作者」が文中に記されることの意義を考察する。

そこで、「作者」と語った語り手の性格を鋭く言い表した三谷(1996)を引用する。三谷(1996)は語り手を「作者」とした上で、次のように述べている。

この「作者」は、いつも正確な情報を伝えるとは限らないのである。改変した<話素>を始めから記すことを避けて、誤報を伝えて、読者を操っているのである。しかも、「暇を出された」とあるから、この男は、「下人」さえないのである。(pp.255-256)

この「誤報を伝えて、読者を操っている」は、誤報を伝えて、後からより適切な情報を出すことで、読者に解釈を改めさせる語りのことを三谷(1996)は述べているものと思われるが、「作者」が書いていない文を「書いた」と語ったのも「誤報を伝え」と解釈してよいだろう。

では、わざわざ語り手が「作者」が「書いた」という誤報を伝えたことの効果は何か。また、三谷(1996)は、語り手について次のようにも述べている。

既に述べたように、『羅生門』では、語り手＝書き手は実体化されて表出されていた。その人物は、「旧記」を読み、それを前本文としてこの本文を書き、「蟋蟀」に「きりぎりす」という訓みを付け、フランス語を使用する、いささか衒学的な人物であった。しかも、彼は、テキストの中で「作者」と名づけられている。(p. 214)

この三谷(1996)のように、語り手を「衒学的」な人物、あるいは三谷(1996)をふまえた河野龍也(2012)のように「嫌味な奴」(p.4)だと評価することができよう。

しかし、既に多くの先行研究が指摘するように、語り手がフランス語を用いることで、平安時代を舞台とする<イストワール>を語る<ナラシオン>が平安時代よりも後世にいることが示唆される。また、存在しない「作者」を記することで、作品中に作者を登場させることなく、読者に、作中に<イストワール>と<ナラシオン>の二層構造をより明確に想起させられるとも捉えることができるのではないだろうか。

これこそが、登場しない「作者」が文中に記されていることの意義といえるのではないだろうか。

出典

- ・相沢毅彦(2016)「『羅生門』という世界観認識」日本文学協会編『日本文学』65巻4号pp.25-36
- ・宇佐美寛(2001)『「分析批評」の再検討』明治図書
- ・江藤茂博(1994)「芥川龍之介『羅生門』論―「語り手」の優位性と重層的テキスト空間―」日本文学協会編『日本文学』pp.12-21
- ・河野龍也(2012)「はじめに」河上龍也ら編『大学生のための文学トレーニング 近代編』三省堂pp.1-5
- ・高野敦志(2006)「芥川龍之介の小説に見られる視点の重層性：「羅生門」「蜘蛛の糸」「報恩記」において」早稲田大学日本語学会編『早稲田日本語研究』15巻pp.24-34
- ・天満尚仁(2013)「芥川龍之介における"語り得ぬもの"：「羅生門」と「或阿呆の一

生」を架橋するもの』『立教大学日本文学』110巻, pp.87-99

・松本修(2015)「視点」高木まさき ら編『国語科重要用語事典』明治図書p.143

・三谷邦明(1996)『『羅生門』の言説分析―方法としての自由間接言説あるいは意味の重層性と悖徳者の行方』三谷邦明編『双書<物語学を拓く>2 近代小説の<語り>と<言説>』有精堂pp.197-237

・渡邊拓(1992)「芥川龍之介「羅生門」の表現について」東京都立大学国語国文学会編『都大論究第二九号』pp.15-26 (今回、本文は志村有弘編(1995)『「羅生門」作品論集成Ⅱ』大空社に拠った。)

参考文献

・石川巧(2016)「『羅生門』精読―「下人の行方は、誰も知らない」と書く「作者」―」日本文学協会編『日本文学』65巻4号pp.13-24

・河上裕太(2019)「〈解離〉を抱える学習者のための『羅生門』論 ―〈解離〉する語り手に注目して」全国大学国語教育学会編『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』137巻pp.125-128

・河上裕太(2018)「〈〈実在〉の文学教育〉のための予備的考察―『羅生門』の実践を通して―」全国大学国語教育学会編『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』pp.285-288

・斎藤昭子(2018)「『地獄変』の語りをとらえる授業実践とその理論的支柱：『羅生門』の語りの問題に接続する発展的学習として」『桜美林論考・教職研究』3巻pp.93-101

・重迫和美(2024)「虚構世界の現実らしさを描出する語りの技法 ?William Faulkner の Absalom, Absalom! と黒澤明の『羅生門』の比較考察?」『比治山大学紀要』第30号pp.15-28

・高橋茉由(2021)「西郷文芸学「相変移」論と田中実「第三項」論：『羅生門』における読みの比較分析を通して」国語教育思想研究会編『国語教育思想研究 22号』pp.31-36

・田中実(2016)「〈自己倒壊〉と〈主体〉の再構築―『美神』・「第一夜」・『高瀬舟』の多次元世界と『羅生門』のこと ―」日本文学協会編『日本文学』65巻8号pp.2-15

・長谷川達哉(1998)「下人の行方と、語り手の「いま・ここ」」『中央大学国文41』(今回、本文は浅野洋(2000)『芥川龍之介作品論集成 第1巻羅生門―今昔物語の世界』p.194に拠った。)

・早瀬輝男(1987)「『羅生門』―下人の人物像と主題」解釈学会編『解釈 第三三巻第一〇号』教育出版センター新社pp.23-29 (今回、本文は志村有弘編(1995)『「羅生門」作品論集成Ⅰ』大空社pp.454-460に拠った。)

・前田角藏(1996)「『羅生門』論―老婆の視座から―」日本文学協会編『日本文学』45巻2号pp.29-41

・前田雅之(2016)「『羅生門』―存在の物語」日本文学協会編『日本文学』65巻4号pp.2-12

・真杉秀樹(1994)「『羅生門』の記号論」解釈学会編『解釈 通巻四七六号』教育出版センターpp.33-39 (今回、本文は志村有弘編(1995)『「羅生門」作品論集成Ⅱ』大空社pp.43

3-439に拠った。)

・丸山義昭(2012)「『羅生門』『山月記』の〈語り〉を読む授業——その構築に向けて」
日本文学協会編『日本文学』61巻8号pp.54-64

・丸山義昭(2012)「〈物語〉と〈小説〉の違いを授業に生かす：『走れメロス』『羅生門』『山月記』を例に(自由研究発表)」全国大学国語教育学会編『全国大学国語教育学会国語
科教育研究：大会研究発表要旨集』123巻pp.69-72